2019ver.

Butterflies in my stomach

作・構成　吉田小夏

※この上演台本は、一部に出演者達本人のことばが採用されている。台詞の表記で“一部字体の違う部分”については、作者と俳優達による演劇ワークショップの中で生み出された、出演者の七人の女優本人の綴った手紙や個人史の年表を、作者が抜粋し、劇作家として構成したものである。

※女性７人ではなく、男女混合での上演を希望する場合、登場人物のうち特に、女１、女５については、男性の俳優でも上演しやすいと思われる。

※この作品は、オールメール版での上演歴もあるため、演出の趣向によって、あらゆるジェンダーのパフォーマーによる上演もまた、可能となっている。

※この作品は、７つの異なる年代の俳優で上演するためではなく、もともと、同年代の７人の俳優で上演することを想像して書かれたものである。

※本作は、もともとリーディングドラマ形式の上演に向けて書きおろされたものであるが、他のすべての戯曲と同じく、あらゆる上演形態の可能性を持つ。

●登場人物

女１・・・いち・・・（５７歳のななこ、他）
女２・・・にい・・・（１７歳のななこ、他）
女３・・・さん・・・（４７歳のななこ、他）
女４・・・しい・・・（６７歳のななこ、他）
女５・・・ごお・・・（３７歳のななこ、他）
女６・・・ろく・・・（７歳のななこ、他）
女７・・・なな・・・（２７歳のななこ、他）

●場所

さまざまな場所を思わせる、温かくも何も無い空間。そして、７脚の椅子。

●時

あるひとりの女の、７才から７７才のあいだ。
（そのいくつかの時間が、７人の女優によって上演される。）
めぐりつづける春夏秋冬、春、春、春。
繰り返すいのちと、思いだせないいくつかの夢。
マバタキ。星屑。ささやかな日々。
雨のようにふりそそぐ、無数の言葉のかけら。
やがて降りつもる、はじめての物語。

開場中。
夕霧の満ちた部屋の中にゆるやかに流れる音楽。
会場の中、思い思いの場所で本を読む、７人の女優達。
白い冬の空の下だ。木々の花の芽のようにやがて息づき、そっと集まる女達。

■０■　０才　■　７人の出演者の個人史（春年表）より、０歳迄のコラージュ。

女４　１９８３年。春。マイナス３歳。父・母、結婚二年目。父の両親と同居生活。月に一度は、父と母二人で旅行や山歩き。・・１９８４年、春。マイナス２歳。母、なぜ赤ちゃんができないか病院で検査。卵巣がひとつしかない事がわかる。・・１９８５年、春。マイナス１歳。ひとりがひとつの音を奏でる方法で、子守唄のメロディが流れ出す

女３　１９８１年、春。マイナス１歳。３月２３日。父と母、お見合い。父、ホテルを間違える。母「謝り方が良かった」。

女５　１９７６年、マイナス１歳！とんがった大きなお腹をよく蹴る。男の赤ちゃんだと「直樹」と命名。野球選手にする！と張り切る父。

女３　１９８２年、春。胎教に良い、と、両親『屋根の上のヴァイオリン弾き』を観劇。母はマクビティビスケットばかり食べていた。

女７　１９８５年、マイナス１歳。お腹の中で聴く歌声はとても優しい。ぐるぐる楽しく動き回る。

女２　１９９１年、春。０歳。父と母、３月３日ひなまつりに結婚式をあげる。１１月、３３３０ｇで誕生した、私。

女１　１９７９年、０歳。自己主張の激しい子で、たまに静かに寝ていると、不安になり、夜中に何度も確認する父と母。

女５　１９７７年、０歳。風邪をひいた母が、３歳の姉に私の子守りを頼むも、姉、おむつ替えが上手くできず失敗。二人で大泣き。

女７　１９８６年、０歳。９月に誕生。花のように育つようにと、ゆり。よく泣く。お花のメリーが大好き。

女６　１９９２年、０歳。誕生。病床の祖父に、「歌手になるかなぁ、女優さんになるかなぁ」と言われる。

女４　１９８６年、春。３月３日、朝５時に母が産気づき、９時２７分、誕生。３６３５ｇと大きかったが、母安産。祖父と同じ誕生日。子守唄、フレーズにあわせておわる。

女１　いち。

女２　にい。

女１　いち。

女２　に。

女１　いち。

女２　にい。

女３　さん。

女４　し。

女7　はじまるの？
女1　そう。・・いち。
女2　に。
女3　さん。
女4　し。
女6　あ、や、
女6恐れて椅子を立ち輪から飛び出す。
女3　さん！
女4　しい。
女5　ご！
女6　待って、
女5　え、何？
女6　こわい。
女5　え？
女6　だって。
女3　行こう。
女6　はじまりって何？
女7　え？
女6　はじまったら、私どうすればいいの？
女3　簡単。
女6　簡単？
女4　はじまったら、もう立ち止まらない。神様が「おかえりなさい」って言う、その日まで。
女6　それだけ？
女1　そう、それだけ。
女6　はぐれない？ひとりぼっちになったりしない？
女2　大丈夫。行こう。おいで。
女6　・・うん。
女1　いち。
女2　に。
女3　さん。
女4　しい。
女5　ごお。
女6　・・ろく。（思いきって自分の椅子に戻り）
女7　なな！
女1　いち。

女2　に。
女3　さん。
女4　しい。
女5　ごお。
女6　ろく！
全員　なな。
女1　Butterflies in my stomach
女2　そう、
女3　これは、
女4　ななつの音色で奏でる、大人のための絵本の時間。
女6　なな。・・私が、ななつの時。はじめて、人は死ぬのだということを知りました。
女1　はじめの、はじまりは、
全員　私が、
女6　ななつの時のおはなし。

■1■　7才　■　冬

7才の時のななこ、絵本をかかえてポツンとお墓の前にたっている。中学生の兄（女3）と、小学生の弟（女1）が、並んで少し離れたところから女6を見ている。

女6　・・。
女3　オイ、ななこ。
女6　・・。
女3　オイっ！！・・オイっこら、聞いてんのかっ！！！
女1　・・。（女3の顔色をチラチラとみている）
女3　え？
女1　ううん。
女3　え？何？
女1　なんでもない。
女3　何、なんだよ。
女1　いい。・・お兄ちゃん、怒るとこわいんだもん。
女3　怒ってないだろ、別に！
女6　おこっちゃヤダよ。
女3　怒ってないだろ、別に！
女1　・・しっこ。

女3　ええ？
女1　兄ちゃん、オレ、おしっこしたい。
女3　なんか、そのへんの草むらでしてこい。
女1　やだよ、恥ずかしい。
女3　何いってんだよ、ああ、もう。
女1　ねぇ、おねえちゃん、もう帰ろうよ。日が暮れちゃうよ？
女3　ななこ！もういくぞ？お母さん、もうあっちで車、エンジンかけちゃってるぞ？おいてっちゃうからな！いんだな？
女1　もう帰ろう？帰りに、ペコちゃん行って、ケーキ買おう？
女3　ほら、こんなとこいたら、風邪ひくって！
女6　まだ帰らない。
女3　え？
女6　おばあちゃんと一緒にいる。
女3　だからさ、
女6　おねがい、もう少しだけ。
女3　また、お墓参りにくればいいじゃない。
女6　わたし、もう少し、ここにいる。おばあちゃんと一緒にいたいの。
女3　だから・・。もう、ばあちゃんは居ないんだって！
女6　・・。
女3　ごめん。
女6　・・。
女1　にいちゃん。
女3　え？
女1　オレ、もうだめだ。
女3　え？
女1　しっこ、でる。
女3　馬鹿！もう・・ホラ、そっちの原っぱ・・。おい、こいつの終わったら、本当に帰るからな！

兄達、退場する。ななこひとりになる。ひとりになると、風の音が耳につく。
ななこ、めそめそしだす。と、風の音（女達の声）に混ざって、祖母の声が聞こえる。
女7　・・ななこちゃん・・。
女5　ななこ。
女2　ななこちゃん・・。
女6　・・！（ななこ、風の中に祖母を探す）
女4　ななこちゃん。ここ。
女6　おばあちゃん！

女４　うふふ。出てきちゃった。
女６　・・。
女４　ん？
女６　土のした、暗くない？
女４　そうねぇ。
女６　こわくない？
女４　ちっとも。
女６　ほんと？こわかったら、すぐにお墓からお電話して、ななこを呼んでね？飛んでくるから。
女４　ありがとう。
女６　うふふ。
女４　・・それ、持っててくれたのね。
女６　うん。この本ね、今までにもらったお誕生日プレゼントの中で、一番好き。
女４　そう？
女６　うん。お兄ちゃんにもらったのより、お母さんにもらったのより、おばあちゃんにもらったのが、いつも一番好きだった。
女４　・・ごめんね。
女６　え。
女４　今年は、もうプレゼント、あげられないね。
女６　ううん、そういう意味じゃない。いいの、なんにもいらないよ？
女４　ななこちゃんは、次はいくつになるの？
女６　今ななつだから、つぎは、やっつ。
女４　そう。そうか。
女６　おばあちゃんは、次はいくつになるの？
女４　おばあちゃんはね、もう、おしまい。
女６　え？
女４　お墓の下に入るとね、もう、お誕生日は来なくなるの。
女６　じゃあ、お祝いのケーキは？
女４　（さみしそうに微笑む）
女６　・・おしまいって何？ロウソク、吹かないの？
女４　そう、ケーキも食べられないし。
女６　・・・。
女４　そんな顔しないで。
ななこ、祖母に近づき、きゅっと抱きつく。そして、抱擁をほどき。
女６　ね、またご本読んで。

女４　そうね。じゃ、今日は一緒に読みましょうか？
女６　うん。
風が絵本を運ぶ。女４、女６と一緒に絵本をひらき、絵本の中の詩を読みだす。
（劇中の詩は、絵本「The Important Book」より抜粋、引用。）
まずは祖母役の女４が一行を読み、女６はその一行を復唱する。一行づつ復唱されながら詩は読まれる。女４「たいせつなこと」、女６「たいせつなこと」、という具合に。

たいせつなこと
ゆきは　しろい　ということ
つめたく　はかなく
そっと　そらから　まいおちて
ゆきは　かがやく
すがたは　ちっちゃな　おほしさま
すいしょうの　かけら
ゆきは　ひんやり　ひえて
ふわりと　とけて
きえてゆく
けれども
たいせつなことは　ただ
ゆきが　しろいこと

ふたり、満足げに拍手。風がページをめくる

たいせつなこと
かぜは　ふく　ということ
みえないけれど
かぜは　ほほをなでてゆく
そうして　もりをゆらし
ぼうしを　ふきとばして
ふねを　はこんでゆく
けれども
たいせつなことは　ただ
かぜが　ふく　こと

風のふく音がきこえる。ふたり、絵本の中の詩、２編を読み終える。
女６　おばあちゃん。

女4　ん？
女6　きっと、また会えるよね？
女4　・・。
女6　約束して、お願い。
女4　そうね。じゃあ、ななこちゃんが、この絵本をひらく時には、おばあちゃんいつもお側に行って、一緒に読むことにするわ。
女6　本当？
女4　ええ。
女6　すごい、魔法のランプみたい。
女4　そう。表紙をひらくと、どろろろろ～ん！
ふたり、笑う。と、離れたところに、母（女2）がいる。
女2　ななこっ！
女6　あ。
女2　いい加減にしなさい！　お兄ちゃん達、もう車乗ってるのよ？
女6　お母さん、ごめんなさい。
女2　お外にいて、また、熱が出たらどうすんのよ！
女6　お母さん、あのね、今、おばあちゃんとね。
女2　あやまりなさいっ！
女6　え。
女2　馬鹿なこと言ってないで、ちゃんと、あやまんなさい！
女6　ごめんなさい。
女2　何が悪かったのか、ちゃんといいなさい。
女6　・・ずっと、お外に居て、・・わがままをいって、ごめんなさい。
女2　ほんとに、誰に似たんだろうね？
女4　・・。（女2を悲しそうに見ている）
女2　ホラ、帰るよ。
女2、女6のそばに歩み寄り、がっと乱暴に手を掴んで引きずるようにひっぱってゆく。
女6　待って、おばあちゃんが。
女2　変なこと言わないの！
女4　・・ふたりとも、元気でね。
女6　・・。
風だけが残る。
女6　母は、とても厳しい人でした。仕事もしていたし、いつも何かに追われるように忙しくしていて、よく怒鳴られた。おばあちゃんが居なくなってからは、ますます怒りっぽくなった。
女2　でも、今思うと、母は淋しかったのかもしれません。

女1　母は、綺麗な人でした。
女6　いつもきっちりと赤い口紅をひいて、爪もピカピカにしていて、でも、笑うとなんだかとても悲しい顔に見えた。
女5　そうか。そうだったんだね。
女6　好きじゃなかった。
女6、2、みつめあい。
女2　あの頃の私は、母が、好きじゃなかった。好きじゃないことが、とても悪いことに思えた。
女6　でも、おかしな話で、
女2　10年もしたら、私は、
女6　私は、
女6、2、の結ばれていた指先、ついに離れる
女2　母親にそっくりな顔の娘になっていました。
女6、退場
女2　じゅうなな。・・私が17の時。はじめて、あの人を知りました。

■2■　17才　■　春から、夏

学校の廊下。響くチャイムの音。朝の授業の始まるまえで、ガヤガヤとしている。

女3　おはよう。
女2　おはよう。
女3　あれ？ななこ、髪切った？
女2　えー、切ってないよ。
女3　え？ほんと？なんか違う。いい。
女2　え、そう？そうかなぁ？
女2、3、教室に入り、
女5　おはよう。
女3　ねぇ、今日帰り、モス行くよね？
女5　あ、
女3　ていうか、宿題あったっけ？
女5　あ、お、おはよう。
女2　あ、ごおくんおはよう。
女5　おはよう。うん。
女3　何、うん、て、あんた。
女5　え、別に。

女4　ねぇ、今日、新しい人来るって聞いた？
女3　え？転校生？
女4　なんか、わけありらしいよ？
女2　え？何どういうこと？
女3　男？女？
女4　男だって。
女3　うそ、やった！
女1　何よ、やった！って。
女3　へへへへへ。
女4　何？何、見てんの？
女5　え。や、別に。
女2　ごおくん、知ってた？
女5　や、知らなかったな。
女3　でも、昨日プリケツ、なんも言って無かったよね？
女4　ほら、だから、わけありだから。
女3　えええ？やだ、いい、ミステリアスな男っていい。
女1　何よ、ミステリアスって。
女2　（観客に）プリケツって、いうのは私達の担任の先生で、本当の名前は沢村先生。歩く時、お尻をぷりぷり振りながら歩くので、皆は、プリケツって呼んでました。

沢村先生（女6）、青年（女7）廊下を進んで、教室に入ってくる。

女5　・・起立！
全員立つ
女5　礼！
全員礼
女5　着席。
女6　はい、おはようございます。今日は、授業の前に皆さんに新しいクラスメートを紹介します。仲間が増えて、とってもいいことですね。ご挨拶して。
女7　あ。ナナセリョウヘイといいます。・・よろしくお願いいたします。
女6　じゃ、ナナセ君は、そこの席。わからないことがあったら、隣のゴウダ君に聞いてね。
女7　あ、よろしく。（ななこを見て会釈する）
女2　・・。
女5　あ、ゴウダはこっちです。どうも。
女7　ああ、すみません。よろしく。

女５　いえ。あ。
女２　・・。
女６　じゃあ、教科書３９ページ。先生が読むから、みなさん続けてください。
女２　あの人が隣の席に座った瞬間、ふわって、いい匂いがした。懐かしい匂い。
女６　“僕の生まれ育った土地では、”
全員　僕の生まれ育った土地では、
女６　“素顔をさらしたり、自分の本性をむき出しにしたりするのが、忌むべきことと考えられていました。”
全員　素顔をさらしたり、自分の本性をむき出しにしたりするのが、忌むべきことと考えられていました。
（“”内は、絵本「フェイク」より引用。一部抜粋。）
ナナセ、足を組むなど少し動く。もう一度、ふわっといい匂いがななこに届く。
女２　ソーダ水みたいな。
全員　ふわっ、・・しゅわわわわわわ・・。
女２　あの頃の私は、顔と匂いと声だけで恋に落ちた。
女６　“あらゆる手段をこらして。”
全員　あらゆる手段をこらして。
女７　“素顔を人に見られないように努めるのが、そこの人々のならわしだったのです。”
全員　ならわしだったのです。
女２　ナナセ君。
女４　なんか、わけありらしいよ？
全員　なんか、わけありらしいよ？
女２　彼の「わけあり」についての噂は、バカバカしくて、どれもでたらめな感じでした。
女５　や、知らなかったな。
全員　や、知らなかったな。
女２　あまりよくない噂もあったけど、
女７　おはよう。
全員　おはよう。
女２　私には優しい人に思えた。机を並べて何ヶ月かたつとますます優しい人に思えて。もう、夏で。ふわっ、・・しゅわわわわわわ・・。
女３　ねぇ、今日帰り、モス行くよね？
全員　ねぇ、今日帰り、モス行くよね？

女２　え？
チャイムの音。そうそこは、数か月後の放課後。もう、夏だ。
女３　ねぇ、ナナセ君も、一緒にモス行かない？ねぇ？ななこ？
女７　え？
女２　ああ、うん。
女７　あ。じゃあ、ごおも。ごおも、一緒にいこうぜ？
女５　え、いいの？
女３　ああ、・・じゃあ。
女２　あ、私、ちょっとお金おろさなきゃ。
女３　えー？じゃ、お店で合流しよっか？
女５　お。
女７　じゃ、俺、自転車とってくるから、後で。
女３　じゃあ、後で。
女４　バイバイ、また明日―。
女１　バイバイ。
女３　バイバーイ！
女２　バイバイ！・・バイバイして、ダッシュで走りました。お財布の中が少ないのがナナセ君にバレて、恥ずかしかった。走って、走って、走って、ATM でお金をおろして急いで外に出たら、目の前に、赤い自転車。
女７　・・荷物、カゴに入れなよ。
女２　あ。・・ううん、大丈夫。モス、行こっか？
女７　ねぇ、俺、すごい面白いこと考えたんだけど。
女２　え？何。
女７　あいつら、ふたりっきりにしちゃおうぜ？
女２　ええ？
女７　ごおと、さんちゃん。面白くない？
女２　あ。・・え、でも。
女７　乗って。あんま、二人乗り、うまくないけど。
女２　え、どこに行くの？
女７　走りながら考えよう。行こう。
女２、女７の自転車の後ろに乗る。おずおずと女７に掴まる。ヒグラシの声とソーダ水の泡がはじける音。風の中をこいでゆくふたり。夏の夕暮れに舞う、数羽のアゲハ蝶。
女２　あ、ちょうちょ・・。
女４　その夏、私は、何度も赤い自転車にのりました。
女１　ふわっ、・・しゅわわわわわわ・・。

女2　ナナセ君。ねぇ、見た？アゲハ蝶。
女5　夏休みになると、自転車で海に行った。裸足になるのが好きだった。
女4　泳ぐのに飽きると、ふたりで、もっと遠くまで行った。
女3　ふわっ、・・しゅわわわわわ・・。
女2　ナナセ君。
女2と女7、自転車で走りながら時とともに若い恋人同士の距離になり、ふたりで踊る。
女2・7　ふわっ、・・しゅわわわわわ・・。
ヒグラシの鳴く夏。向き合って見詰め合っているふたり
女7　好きだよ。
女2　・・。
女7　そんな顔しないで。
女2　あたし、今どんな顔してる？
女7　子供みたいな顔、してる。
女6　ふわっ、・・しゅわわわわわ・・。（7才のななこで）
17歳のななこ、思い出のかなたの7歳の子供のななこと一瞬目が合う。
女7　・・何十年もたったら、ななこは、俺の顔、忘れるのかな。
女2　どうしてそんなこと言うの？
女7　・・ごめん。
女1　ふわっ、・・しゅわわわわわ・・。
女2　言葉の少ない人でした。あの日、つきあってから、十八回目のセックスの後で、私達は甘い炭酸水を飲んでいた。そして、それっきりでした。
女7　あの夏の日の夕暮れと、あの人の顔を、今でも恐ろしく鮮やかに、覚えています。
女4　ふわっ、・・しゅわわわわわ・・。
女6　おはようございます。・・今日は、授業の前に、皆さんに悲しいお知らせがあります。
女2　夏休みが終わると、ナナセ君はもう居なかった。新聞に小さな記事が載りました。夜更け、踏切の真ん中に立って、じっと雨に打たれていた少年と、その死について。別れの挨拶はなかった。言葉の少ない人だったから。
蝉時雨、少しづつ強く。蝶の消えた晩夏の空を仰ぐ、ななこ達の後姿。
と、女7だけがふりむき、

■3■　27才　■　秋

女7　にじゅうなな。・・私には、二十七回目の誕生日が来ました。

女7、窓ガラスに映る自分の顔をじっとみつめている。

女7　・・。

女1　ねえちゃん。

女7　あぁ、びっくりした。なんだ、ユウイチか。

女1　ただいま。

女7　おかえり。久しぶりだね。

女1　何、どうしたの、ぼーっとして。

女7　ううん。元気なの？・・どうよ、仕事の方は？

女1　うん、まぁ忙しいけどね。

女7　彼女できた？

女1　いやー、まぁ、なかなかねぇ。

女7　ええ？何よ、それ。

女1　母さんは？

女7　なんか、朝から台所ではりきっちゃってて。

女1　え？！料理してんの？マジ？

女7　うん。びっくりでしょ？

ジョン、登場。

女2　ワン！ワンワン！ワン！

女1　おお、ジョン！久しぶり！元気だった？

女2　ワン！ワンッ！ワゥオゥ～！

女1　おお、そうか、そうか、よーしよしよし。・・兄さんは？

女7　さっき電話あって、ケーキを買ってから来るって。

女1　そっか。

女7　あと、御茶ノ水の伯父さんも来る。

女1　すげぇ、なんか正月みたい。

女7　うん。

女2　ワン！ワンワン！

兄弟、笑いあう。母、登場。

女4　ちょっと！ジョンを走らせないで！！

女1　あ、お母さん、ただいま。

女4　おかえり。あんた、手洗ったの？

女1　うん、洗ったよ。

女4　ジョンを、走らせないでよ！ホコリがたつでしょ？今日は、こっちの部屋にお料理を並べるんだから。

女１　ジョン、スィッダウン。よーし、よし。
女２　くぅ～ん・・。
女７　何か手伝おうか？
女４　何いってるの、今日はななこが主役なんだから、じっとしてなさい。
女６　（声）ピーンポーン！
女４　え？
女６　（声）こんばんはー！
女４　やだ、御茶ノ水もう来た！ユウイチ！椅子、並べて。早く。
女１　あ、うん。
女６　（声）こんばんはー！
女４　あ、はーい、今！ホラ、早く！
母、退場。女１、椅子を並べながら。
女１　お母さんには、・・もう言ったの？あのこと。
女７　・・。
女１　え、まだ言ってないの？
女７　・・。
女１　彼は？今日は来んの？
女７　来る。っていうか、来てる、けど。
女１　え、来てるって？
女７　朝から、お母さんの料理、手伝ってくれてる。
女１　なんだよ。それだったら、今日・・。
親族の御茶ノ水の伯父さん（女６）が現れる。
女６　イヤ～、ななこちゃん、お誕生日おめでとう。久しぶりっ！
女７　ありがとうございます。
女６　いくつになったって？ハタチか？
女７　あの、２７です。
女６　ああ、いいね。いいときだ。一番、いい時だなぁ。
女７　もう、祝うような年でもないんですけど。
女６　何言ってるの？ななこちゃんの年でお祝いできないんじゃ、おじちゃんなんて、もう、・・もう、あれだよ、もう。なぁ？ただの、ハゲチャビンだよ。
女１　伯父さん、どうぞ。立ち話もなんですから。（椅子を勧めて）
女６　ありがとう。あ、その前にお土産。またね、仕事で色々海外に行ったから、これ。
女７　すみません、なんだかいつもいつも。
女６　これ、シンガポールのクッキー、これはね、パイナップルのクッキ

ーね。あとね、これは台湾のお菓子。これはね、パイナップルのね、
なんかね、パイナップルケーキっていうやつ。
女７　わぁ、いつもありがとうございます。
女２　ワン！
女１　しーっ、ジョン。
女６　お？ジョン、お前さんはいくつになった？
女２　ワウオゥ～！
女６　おお、そうかそうか。よーし、よしよし。グッボーイ。
母（女４）、ごお（女５）、登場。
女４　さぁ、じゃ、もうご飯にしましょう。ごおくん、その大皿はここに
置いて。
女５　あ、はい。
女７　ジョン、後でご飯あげるから、あっちでお休みしておいで。
女２　くぅ～ん・・。
女５　前、失礼します。
女６　いやいや。
女４　伯父さん、こちらね、ななこのボーイフレンド。
女５　あ、お邪魔してます。ゴウダです。
女６　はぁ、どうも。
女７　ありがとう。ごめんね、なんか。
女５　うん。ううん。
女４　じゃ、ななこ、お誕生日おめでとう。乾杯！
全員　乾杯！
女３、少し離れて皆を見守り、ぽっぽっとハッピーバースデーの歌ハミングしだす。
女１　いただきます・・。
女４　味はわからないけど。ふふふ。
女６　おお、うまそうだな、これは。・・これは一体なんですか？
女４　グラタンを作ってみたんですけど。
女６　へぇ。
女１　うん、うまい。母さん、うまいよ、これ。
女４　そお？よかった。たまにはいいわね、お料理も。
女６　へぇ・・ああ、これはなかなか。うん、エスニックな味で。
女４　ごおくんも、たくさん食べてね。
女５　あ、はい。
女６　どうだ、ユウイチくん、仕事の方は。
女１　はぁ。なんとか無事に社会人をやっております。

女６　（ごおに）あのね、このこはね、子供の頃は、こーんなちっちゃくて、いっつもお兄ちゃんの後ろばっかり歩いててさ。
女５　へぇ。
女６　何かって言うと、すぐにおもらしをする子どもだったんですよ？
女５　ああ、はぁ。
女４　おじさん、食事中なんですから！
女６　ああ、いやいや。
女４　やめてくださいよ、もう。
女６　いや、申し訳ない。なんだ、お兄ちゃんの方は今日は来ないのか？
女１　あの、後で。
女４　ななこ、どうしたの？それだけ？
女７　え、ああ。
女４　美味しくない？
女７　ううん、美味しいよ、すごく。
女４　じゃ、もっと食べなさい。女はね、痩せっぽちだとろくなことがないんだから。ね？
女５　大丈夫？
女７　うん。
女６　ななこちゃんは？どう？忙しいの？
女７　ええ、おかげさまで。
女４　今度ね、抜擢されて、本社の方に行くことになって。
女６　へぇ、すごいじゃないの。栄転だ、栄転。
女７　あの、
女６　ごおさんでしたか？
女５　あ、はい。
女６　ごおさんは、普段は何をしてらっしゃる方なの？
女５　あ、絵を描いてます。
女６　はぁ。
女５　イラストとか、挿絵とか。あの、細々ですけど・・。
女６　へぇ。
女４　ちょっと、ちゃんとキュウリも食べてる？
女１　食べてるよ。やめてよ、もう子供じゃないんだからさ。
女６　いやでも、いいねぇ夢があるっていうのは。
女５　あの、でも僕も、実は栄転することになって。
女６　ほう。
女５　父親になります。

女６　ほう、・・え？
女７　ごおくん？
女５　・・（ななこの目を見て、黙ってうなずく）。
女７　・・。
女５　ななこちゃんのお母さん。あの、僕達、一緒に暮らそうと思ってます。結婚を前提に。・・あの、よろしくお願いします。
女４　父親って何？
女１　ねえちゃんね、赤ちゃんが出来たんだって。
女４　え？・・え？
女７　ごめんなさい。なかなか言い出せなくて。
女４　なんでユウイチは知ってるの？
女１　お母さん、そういう問題じゃないでしょ？
女４　え？何？なんなの？どうして？どうして、スグに言ってくれなかったの？
女６　まぁまぁ。
女７　お母さん、私ね、
女４　仕事は？
女７　異動は断った。仕事は、お休みすることにしたの。
女４　そんな。どうしてお母さんに相談してくれなかったの？
女５　順番が逆なのはわかってます。でも僕達、きっと幸せになります。約束します。ふたりで、幸せになるって。どうか、許してください。
女４　・・ごおくんとななこじゃ、うまくいかないとおもう。
女７　お母さん？！
女４　あなた、どうやって食べさせてくんですか？
女５　あの、美大のときの先輩のツテで、もっと新しい仕事を・・。
女４　何？なんなの？え？めちゃくちゃじゃないこんな。・・それは、ボーイフレンドとしてはよかったかもしれないけど。そんな、せっかく、だって・・。めちゃくちゃじゃない！
女７　お母さん、聞いて。
女４　勝手にしなさい・・！
母（女４）、席をたって部屋を出て行ってしまう。
女６　おめでとう、ななこちゃん。
女７　・・。
女６　おめでたいことじゃないか！ほら、ちゃんとお祝いしなきゃ。
女５　すみません、僕のせいで。
女６　さぁ、食べよう。冷めないうちにいただこう。せっかくお母さんが

作ったんだから・・。

女7　その日、お母さんは、ずっと2階の部屋にこもってしまって出てこなかった。

女5　すっかり夜になるとお兄ちゃんが来て、ケーキにろうそくが立ちました。27本のろうそく。

女7　それでも母は2階から降りてこようとはしませんでした。火をそっと吹き消して、私は、階段を上った。

女4、窓のそばでひとりさみしくぽつりぽつりと、誕生日の歌を口ずさんでいる。

女7　お母さん。

女4　・・・。(歌うのをやめる)

女7　大丈夫？

女4　・・さっきは、ごめんなさい。

女7　ううん。

女4　ななこが出ていったら、もうこの家、ジョンとお母さんだけなのね。しっかりしなくちゃ。

女7　・・そういうと母は少し笑って、窓の外の月をじっと見ていた。

女1　母は、綺麗な人でした。

女6　いつもきっちりと赤い口紅をひいて、でも、笑うとなんだかとても悲しい顔に見えた。

女5　月の明るい晩のこと。

女4　お誕生日、おめでとう。

女7　私がこの世に生まれてから、ちょうど、27年目のことでした。

■ Rock A Bye Baby ■　春

7人による「Rock A Bye Baby」の子守唄。

女達　Rock-a-bye, baby,On the tree top.
When the wind blows,The cradle will rock;
When the bough breaks,The cradle will fall,
And down will come baby,Cradle and all.

1番を英語で歌う女たち。子守唄は、2番からぽつぽつと雨だれのようなハミングになり、出演者の女性達本人による、結婚や誕生にまつわる手紙が読み上げられる。

女2　神様へ。私の名前は神社で授かりました。画数と年月日を調べたんだそうです。「男だったら強運の持ち主だったのに」と言われました。

女6

ずっと、男に生まれたらよかったのになぁ、と思っていました。どうして女に生まれたのでしょうか？でも最近は、そういうことをあまり気にしなくなりました。きっと、私のまわりには愛があふれているからです。神様ありがとう。だから、もう一度生まれ変わるとしたら、男でも、女でも、大丈夫です。杏文より。

女3

ママへ。生まれてからこの歳になるまで一緒に過ごしてきて、ようやく離れた今、結婚式から引っ越しまで、どとうの勢いで過ぎていって、新居に荷物を運び込んだあとも、さみしさより「さぁ、これから頑張るぞ！」という気持ちでした。それが、その日の夜、彼と二人で向かい合って夕食のテーブルについたとき、急に涙がポロポロ出てきました。私がやりたいと言ったことは必ず応援してくれたこと、いつもいつも、私の体のことを考えてくれていたこと。ママが今まで私にどれほどの愛情を注いでくれたのか、ごはんを食べながら急に思いがこみ上げてきました。本当にありがとう。

女1

お父さんへ、私が生まれてもう37年が経ちました。こんなにも長い年月を、私たちは、文字通り片時も離れずに歩んでいます。いつも、強くて広いだけの背中と、ダジャレをありがとう。ひとつだけ淋しいのは、私が生まれてすぐ、福島の家のリビングでとった、お母さんと私の写真のことです。お父さん。あれは、私です。弟ではありません。なんとなくだけれど覚えている気もする。あのケーキや、お母さんの着ている白いふわふわのガウンのことを。今度一緒にもう一度検証しよう。私たちにはきっとその時間がまだたくさんある、と、信じています。お父さんのでこ姫より。

女5

私の恋人だった貴方へ。あれからどの位時が流れたのか、一緒に過ごした年月に比べれば、短く、今も思い出は鮮やかです。元気にしてる？私はいま、すごく自由で、やっと自分が自分に少しずつ近づけている気がしています。あなたに色々言っちゃったけど、思い返せば全て、あなたを通して見える私自身に言っていたのだなぁ、って、今なら思います。血がつながっていたら良かったのにって、何度か言ったし、正直今も思います。この血に流れるあなたをどこかで常に感じながら、私はめちゃくちゃ元気にのびのびと、今もこれからも生きて行くんだと思う。ありがとう、そしてごめんね。

天国のおばあちゃんへ。お庭で咲いていたすずらんの花が、今年も楽しそうに咲き誇っていました。最近よく思い出すのは、母がママさんコーラスでおぼえた曲を、ずっと鼻歌で歌いながら料理したりしてたこと。おばあちゃんの歌好きが、母にうつって遺伝したのか、

今は息子もよく歌っています。おばあちゃんの、けして上手ではないけど、大きな声で楽しそうに歌っている姿が好きだったよ。私が大きくなってからも、一緒にベッドで横になりながら、大きな声で歌ったね。今も、あの楽しい声を思い出します。

女7　これから出逢う、小さなあなたへ。一緒に歌を歌いたいですね。どんな声で歌うのかな？お母さんになった私は、きっと、大きな声で一緒に歌っている気がします。あなたの声を、笑い声を聞くのが本当に楽しみです。今どんな音が聴こえていますか？私のまわりはとても賑やかです。あなたと出逢ったら、もっと賑やかになるんだろうな。うるさーいと言ったり、うるさーいと私も言われたり。考えてる事と実際起こることは違っても、とにかく楽しみ！！

女4　夫へ。お誕生日おめでとう。君と出会って十一年。楽しいこと、苦しいこと、お互いたくさん経験したけれど、君と今、家族になれたことを幸せに思います。生まれた時、君はどんな感じだったんだろう？お喋りな君のことだから、元気のいい産声をたくさんあげたんじゃないかな。お母様は君を産む時、痛さで大変だったと聞くけれど、今、とてもお母様思いの君を見ていると、誇らしいような嬉しいような、温かな思いになります。君と一緒に歩いていけたら、どんな道も怖くない。笑顔で進んでいけるさと、心強く思います。いつもありがとう。妻より。

■4■　37才　■　秋

女5　さんじゅうなな。・・そう、37才。結婚してちょうど10年が経ちました。夫婦がだんだん似てくるっていうのは、本当なんですね。10年も経つと、私とごおくんはだんだんと似てきて、いまじゃ、もう、娘が見間違えるくらいにそっくり・・。って、いうのは、さすがに大袈裟かもしれないですけれど。

女5は、夫のごおと、ななこを一人二役で落語のように演じる。

女5　お。・・ななこ。ななこ？

女5　あ、あなた。

女5　なんだ、まだ起きてたの？

女5　ごめんなさい、先に寝てて。

女5　何、作ってるの？

女5　ももこが学芸会で着る衣裳。かわいいでしょう？

女5　そうか。うん。

女５　３組はね、「人魚姫」のミュージカルをするんだって。
女５　へぇ。じゃあ、ももこは明日は、お姫様の役かな？
女５　ううん、蟹のセバスチャンよ。
女５　娘も、やっと小学３年生になりました。名前は、ももこと言います。
大きな拍手に包まれる体育館。学芸会の日、子供達が体育館でそわそわしている。
女１　はーい、３組さんはこっち！皆、ちゃんといる？今、２組さんの発表が始まったから、静かにね。
女２　先生！
女１　なに？
女２　ももこちゃんが、泣いてます。
女１　え？何どおした？
女３　泣いてないもん。
女１　何どおしたの？あれ？ももこちゃん、頭に着ける飾りは？
女３　ずっと、見つからないの。
女１　ええ？
女３　お家に置いて来ちゃったのかもしれない。
女１　あらら。
女６　あーあ、やっちゃった。
女７　男子うるさい！
女６　うわ、こわ。
女７　私は人魚。私は人魚・・。（ぶつぶつと）
女３　どうしよう先生、ももこ、ちゃんと蟹に見えるかな？
女１　大丈夫よ、いっぱい練習したんだから大丈夫。
女２・４ぷくぷくぷくぷく、ぷわっ！ざっぱーん！ふふふ。
女１　コラ！海の泡の役の人達は衣裳がひっかからないように気をつけて。
女２　はーい。
女４　ねぇ。ねぇ、先生。
女１　何？
女４　わたしのママね、まだ来て無いみたいなの。もう着いたかな？今から客席に戻ってもいい？
女１　ええ？ダメダメ。来てるでしょ？ちょっとそこの袖から覗いて見てごらん。そーっとだよ？
女２　しいちゃん、じゃ、一緒に探そう？
女４　うん。そーっとね。
女４、２、椅子の背もたれからそっと外をのぞく。
女６　あーあ、オレの親は、来るなって行っても来るからなぁ。

女2　そういうこと言っちゃいけないんだよ。
女1　しーっ。皆、トイレは大丈夫？ちゃんと、おしっこ行った？
女4　あ、居た！ママ・・！ふふふ。
女2　ふふふ。
女4、2、親にこっそり手をふる。女5（ななこ）が大急ぎでやってくる。
女5　すみません、失礼します・・申し訳ありません、失礼します。・・・ももこ、ももこ！
女3　あ、お母さん！
女3、女5を発見して嬉しそうに手をふる。女5も手をふる。
女5　これ、衣裳の髪飾り。
女3　あ。
女5　ごめんね、お母さん袋に入れたまま渡すの忘れちゃって。
女3　ううん。ありがとう。
女5　ホラ、ちょっと出して着けて御覧。
女3　うん。
女5　ああ、良かった、まにあって。
女2・4ぷくぷくぷくぷく、ぷわっ！ざっぱーん！ふふふ。
女3　・・・。
女5　・・どうしたの？
女3　なんで、赤いスパンコールなんてつけたの？
女5　や、ももこがキラキラにしたいって言ってたから、ちょっと。
女3　どうしよう。こんなの変。全然かわいくない。
女5　そんなことないよ？
女3　ぶつぶつしてて気持ち悪い。ピンクじゃないし。
女5　え？蟹さんはだって、赤い色でしょう？
女3　違うよ、セバスチャンはピンク色の蟹なのっ！全部ピンクじゃなきゃだめなんだよ！台無しじゃん！
女5　ごめんなさい、お母さん・・知らなくて。
女3　もう駄目だ。こんなんじゃ、蟹に見えない・・。（めそめそ泣きだす）
女1　ももこちゃん？大丈夫？
女5　あの、すみませんなんだか。
女1　大丈夫ですよ。ちょっと、緊張しちゃっただけだよね？もうすぐはじまるよ？がんばって。
女5　ももこ・・。
女3　もういい、髪飾りなんていらない！
女5　・・。

女1　あの、お母さんも、そろそろ客席に。
女5　あ、はい。・・がんばってね！お母さん、見てるからね！
女1　ちゃんと全員いる？
女7　はじまるの？
女1　そう。・・準備はいい？
大きな拍手に包まれる体育館。3組の上演がはじまる。
女5　できるだけ客席の一番端の方を選んで、目立たないように、そっと観ました。ももこの蟹の演技はとても良かった。笑顔がいっぱいで、本当に見事な蟹でした。髪飾りはつけていなかったけれど。でも、カーテンコールでは、ちゃんと手に持って出てきたでしょう？
女3　え？
女5　あの、髪飾り。
女3　そう？
女5　そうだよ。
女3　そうだったかしら。
女5　あの時は、ごめんね。
女3　ぷくぷくぷくぷく、ぷわっ！ざっぱーん・・。
女2・4　ねぇ、そうだったでしょう？
女3　そうだったのかしら・・。
女5　覚えてる？帰りに一緒にペコちゃんに寄ったでしょう？それで、本屋さんで絵本を買ってくれて。
女3　ぷくぷくぷくぷく、ぷわっ！ざっぱーん・・。
女2・4・6・7・1　あれは、どの季節の頃だったかしら？
女5　王子は夢を見ながら花嫁の名を小さく呼びました。それを耳にした時、人魚姫の手の中でナイフがふるえました。
女7　「このナイフで王子の胸をひとつきし、そのかえり血を浴びれば、お前は元の人魚に戻れるのだよ？」
女1　人魚姫は、ナイフを海に投げ入れました。投げた所に赤い光が射して、そこから血のしずくが吹き出したようにおもわれました。もう一度だけ、人魚姫は、うつろな目で王子を見つめ、そして次の刹那、海の中へ飛び込みました。
女2　そうしてみるみる、カラダが泡になってとけていくのを感じました。
女1　悲しい物語を読むと、今でもナナセ君のことを思い出す時がある。
女5　その時、おひさまが海の上にのぼりました。その光は、やわらかに、
女3　あたたかに、冷たい海の泡の上にふりそそぎました。人魚姫は、眩しい光の中で、何千何万という空気の精霊が自分を包み、ふうわり

空を漂いながら昇ってゆくのを見ました。

女6　人魚姫もまた、ふうわり、ふうわりと舞い上がっていったのです。

女5　昔、祖母が私に教えてくれました。「人間には魂というものがあって、けして消えることがない。カラダが土に還ってしまったあとも、魂は生きているんだよ」って。

女2　人魚のむすめに、魂はありません。人魚は、三百年生きたら、それっきり。海の泡になってそれっきり。そう、奇跡がおきて、人間の男の愛をうけないかぎり。

女7　さようなら、王子様。

女3　だけど、空気の精霊は違います。何百年も風に漂って、やがていつか永遠の魂を手にいれるのです。

女5　え？

女3　お母さんが、教えてくれたんだよ？

女5　そんなお話だったかしら？

女3　言ってたでしょう？お母さんのお母さんのお母さんが、むかしむかし、私に教えてくれたんだって。

女5　おばあちゃんが？

女6　ね、またご本読んで。

女2・1　ぷくぷくぷくぷく、ぷわっ！ざっぱーん！

女4　そのとき人魚姫は、天のおひさまに向かって光る手をさしのべ、生まれてはじめて、涙を流したのでした。一筋の温かなしずくが、自分の頬を伝うのを感じました。― 空気の精霊になった人魚姫は、透き通ったカラダで舞い上がってゆきながら、船の上で、王子と花嫁が自分を探しているのを見ました。ふたりは悲しそうに、海を眺めていました。人魚姫は、目にはみえない姿のままで、花嫁の額にそっと口づけし、王子に微笑みかけました。そうして、ばら色の雲にまぎれて、天たかくのぼってゆきました。

女5、女3、女4、女6、海原の中で見つめ合い、すれ違ってゆく。

■5■　47才　■　夏

女3　よんじゅうなな。・・私が47の時。はじめて、親を見送りました。

湘南地区の海辺の病院。その敷地の中の、海の見える駐車場。

波の音と、カモメたちの鳴く声。車の中にいる、ななこ（女3）、ごお（女5）、ももこ（女2）。夕暮れ間近の空。沈黙。

女５　・・じゃあ、俺は、ここで待ってるから。
女３　うん。
女５　大丈夫？
女３　うん。
女５　・・やっぱり、俺も一緒に行こうか？
女３　大丈夫よ。
女２　あの・・。
女５　ん？
女２　私も、車の中でお父さんと一緒に待つ方がいい？
女５　お前は、お母さんと一緒に行きなさい。
女２　でも。
女５　ちゃんと、会っておいた方がいい。自分のおじいちゃんなんだから。
女３　いいのよ？ももこが、もし、嫌なら無理しなくても。
女２　ううん。お母さん、ふたりきりになれる方がいいのかなって思って。
女３　別に、それは。
女２　そんな。嫌とか、そういうんじゃない。
女３　病院の駐車場からは海が見えた。傾きかけた太陽が、波間を眩しく照らしていました。夫は、カーラジオをかけようとして、ちょっと迷ってからやめると、そっと、缶コーヒーのプルトップを開けた。香ばしくてホロ苦い珈琲の香りが車の中一杯に広がって、私は小さく深呼吸をした。
女５　ななこ。（女１の呼ぶ「ななこ」の声も遠く擦れるようにだぶって）
女３　私は、父親の顔を覚えていませんでした。
女５　ななこ、行っておいで。ほら。おひさまが沈んでしまう前に。
カモメたちの鳴く声。そして一羽の夏の蝶。
女２　あ、ちょうちょ・・。
女１　ななこ。
女３　父は腕のよいカメラマンだったそうです。私が３歳の時、家を飛び出すみたいに、母と別れて、そして、それっきりでした。女の人を綺麗に撮るのが恐ろしく上手で、結婚したばかりの頃の父は、母のこともたくさんたくさん撮ったらしい。
女２　見てみたかったな。
女３　え？
女２　おばあちゃんの、映画スターみたいに綺麗な写真。
女５　エレベーターのボタンを押すと、ももこは小さな声でそういった。

女３　お母さんもね、一度も見たことがない。
女２　そうなの？
女１　ショートホープ、
女７　ウイスキー、
女３　フェリーニの映画、
女５　海水浴、
女６　キングクリムゾン。
女３　それでも私は、父の好きなものをいくつか知っていた。子供の頃、酔狂になった御茶ノ水のおじさんから、とぎれとぎれに聞いたもので。
女１　ショートホープ、
女７　ウイスキー、
女３　フェリーニの映画、
女５　海水浴、
女４　キングクリムゾン。
女６　ある冬の日の朝のことです。お母さんは庭に出て、１００枚以上もあった自分の写真を残らず焼いてしまいました。きっとあれは、父が撮ったものだったのでしょう。・・お母さん？
女２　おはよう、ななこ。
女６　何してるの？焚き火？
女２　やけどするといけないから、あっちに行っておいで。
女６　焚き火するなら、私、お芋を焼いてみたい。
女２　じゃあ、こんどお兄ちゃん達と一緒にやろうね。
女６　やだ、お母さんとがいい。
女２　あっちに行ってなさい。
女６　でも。
女２　おばあちゃんのとこ行って、牛乳出してもらいなさい。ちゃんと、温めてもらってね。
女６　うん。
女２　お願いだから、ひとりにしておいて。
女６　・・ごめんなさい。
女３　火の粉がパチパチと燃えて、母の顔を赤く照らしていました。私の嫌いな、淋しい顔だった。・・廊下を走っておばあちゃんの寝室に行き急いでお布団にもぐりこむと、ぎゅうっとおばあちゃんに抱きついた。
女４　ななこちゃん？どうしたの？・・泣いてるの？

女３　泣いてなんかない。泣くことじゃない。
女７　ゴウダナナコさん、ですか？
女３　はい。
女７　来てくださったんですね。ありがとうございます。
女３　紺色のポロシャツを着たその男性は、私に深く頭を下げて、
女７　あの僕、・・ちょっと、食堂の方に行っていますので。お父さん？なな
　　こさんが、来てくれたんだよ？
女１　・・。
女３　そうか、私には、弟がもうひとりいたのか、と、恐ろしく冷静な頭
　　で、思った。
女１　・・。
女３　あの。
女１　・・ななこさん？
女３　はい。
女１　そうか、うん。
女３　あの、これは娘のももこです。
女１　ああ、・・そうか。うん。
女２　こんにちわ。・・はじめまして。
女１　無理を言って、・・すまなかったね。
女３　いえ。
女６　チチキトク。
女３　その電話をしてきたのは、御茶ノ水のおじさんでした。母が絶縁し
　　てからも、おじさんだけは細々と父に連絡を取っていたのです。
女６　お兄ちゃんは行くつもりはないそうだ。ユウイチ君はちょっと迷っ
　　てたけど、シアトルからじゃ飛んで帰るわけにも行かないからって。
女３　お母さんは？と言いかけて、すぐに愚問だと気がついた。
女６　ななこちゃん。おじちゃんは子供がいないから、こういうこと、よ
　　くわかってないかもしれないけど。・・なんだろう。いや。とにかく
　　ね、あちらの話だと、もし会うとしたらこれが最後のチャンスだろ
　　うって。
女１　ももこさん？
女２　はい。
女１　いい名前ですね。
女２　ありがとう。
女１　ななこさんのね、ななこ、っていう名前はね。僕が、考えた。
女２　え。

女3　・・・。（ななこにとっても初耳だった）
女1　おじいちゃんはね、今日までさんざんヤンチャをさせてもらいましたが。娘は、一生に一人だけでした。
女3　ももこは、セーラー服の襟に、ぽたぽた涙を落としていた。でも、私は泣かなかった。
女2　おじいちゃん。
女3　ももこは、父の手をとって握り締めた。泣くことじゃない。泣くことじゃない。泣くことじゃない。
女1　いっぱい勉強して、ゆっくりと育って、綺麗な人になってください。
女3　父の手は、恐ろしくしわくちゃでシミだらけになっていたけれど、私の爪の形と父の爪の形がそっくりなことに気がついて、ドキリとしました。
女1　ななこさん。
女3　はい。
女1　これ、持っていてくれませんか？
女7　そういうと、ベッドサイドの引出しから写真を一枚取り出した。
女5　父は腕のよいカメラマンだったそうです。
女4　女の人を綺麗に撮るのが恐ろしく上手で、
女1　ちょっと、擦り切れているけど。いい笑顔でしょう？
女3　それはまだ小さい頃の、私の写真。
女1　貰ってくれないだろうか。
女3　はい。
女1　そうか。・・よかった。ありがとう。
女3　・・・。
女1　ありがとう。
女2　そこは、海の見える病室で、夕焼けで金色に光る波が眩しかった。
女3　西日が、部屋いっぱいにさしていました。そして、病室を出るとき、
女1　さようなら、ななこ。
カモメたちの鳴く声。さよならの言葉には、振り向かないななこ。
女5　おかえり。
女3　・・ただいま。
女5　うん。
女3　ごおくんは、それ以上、何も言わないでいてくれた。今度は、迷わずにカーラジオをつけて、車にエンジンをかけると、なめらかに海岸沿いの道へ走り出した。
女2　私、この曲好き。

女3　遠ざかる車の窓から、もう一度だけ病院を見て、そして父に貰った写真を取り出した。
女5　今日は、どこかで食べて帰ろう。
女3　写真の裏側を見ると、万年筆の文字で、「ななこ、2才、縁側にて」。
女1　ななこさんのね、ななこ、っていう名前はね。僕が、考えた。
女3　お父さん。
女2　・・綺麗。お母さん見て、夕陽が沈むよ？
カモメたちの鳴く声と波の音が、家族を乗せた小さな車体を包んでゆく。

■6■　57才　■　春

女1　ごじゅうなな。そう、57才の春が来ました。・・最近、物忘れが多くなってきたので、女友達から薦められて、日記をつけることにした。大して書くこともないように思うけど、なんとか三日坊主で終らないようにしたいと思う。・・と、書いてみたところで、さっそく、もう書くことが見当あたりませんが・・、そうだ。け、さ、は、また、おっ、とと、喧嘩をしました。・・ねぇ。ねぇちょっと！
女5　え？
女1　聞いてるの？
女5　何？
女1　だから、夕飯。
女5　ああ、うん。まぁ、同窓会なんだから、結構食事も出るんじゃないのかな？
女1　じゃ、いらないのね？
女5　え、うん、まあ。
女1　はっきりしてよ、ちょっと。
女5　まぁ、お茶漬けくらいはあったら嬉しいけど。
女1　え？じゃあいるの？
女5　え、や。うん。
女1　何、じゃあ、いらないのね。
女5　わかったよ、じゃあいらない。
女1　何よ、その言い方。
女5　そんなに、カリカリするなよ。
女1　カリカリなんてしてないわよ！
女5　わかったよ、わかったから。
女1　口数が少なく優しいところが夫の取り柄でしたが、とにかく「そう

か。」と「うん。」の量が多すぎる。年々、多くなってきている気がする。ももこが家を出て一人暮らしをはじめてからは、ますますそのことが気になるようになりました。

女５　犬でも飼おうか？

女１　え？

女５　や、うん。

女１　誰が散歩するのよ？

女５　や、だって、足腰鍛えたいって言ってただろ?うん。

女１　そんなこと言ったって、だって。

女５　や、ま、猫でもいいんだけど。

女１　適当なこと言わないで。

女５　や、別に、その方がいいんじゃないかな、と思ったからさ。

女１　なんで？

女５　ほら、ずっとふたりきりより、いいんじゃないかと思って。うん。

女１　どういう意味？

女５　別に深い意味はないよ。

女１　・・・。

女５　ななこ？

女１　ふたりが嫌ってことなんですね。

女５　違うだろう？

女１　私、出かけます。

女５　え？

女１　ちょっと歩いてくるから！

女５　ああ、うん。いってらっしゃい！

女１　ももこが置いていったピンク色のジャージをはき、首にはタオルをかけ、ウォーキング用のシューズを履けば準備完了。私は勇ましく歩き出しました。いち、に、いち、に、いち、に、いち、に、

女２　いち、

女１　に、

女２　いち、

女１　に、

女２　いち、

女１　に、

女２　いち、

女１　に、

女２　に、

女3　さん、
女4　し、
女5　ご、
女6　ろく、
女7　なな、
全員　なな、
女1　いち、
女2　に、
女3　さん、
女4　し、
女5　ご、
女6　ろく、
女7　なな、
全員　なな、
女1　家の前の坂を下って、桜溢れる公園の中を横切り、神社のある高台に進んでゆく。頬をなでる風が気もちいい。いち、に、いち、に、

女2　に、
女3　さん、
女4　し、
女5　ご、
女6　ろく、
女7　なな、
全員　なな、
女1　歩くのはとてもいい。無心になれる。そして、余計なことを忘れたり、懐かしいことを思い出したり。そうよ、還暦までに、うんと足腰を鍛えておかなくちゃ。まだまだここからなんだから。

女1　いち、
女2　に、
女3　さん、
女4　し、
女5　ご、
女6　ろく、
女7　なな、
全員　なな、
女1　いち、

女２　に、
女３　さん、
女４　し、
女５　ご、
女６　ろく、
女７　なな、
全員　なな

街角や風の中を横切る懐かしい思い出。女１はその間も、いちにいちに、と歩いている。
女４　はじまったら、もう立ち止まらない。神様が「おかえりなさい」って言う、その日まで。

女１　いち、
女２　に、
女１　いち、
女２　に、
女１　いち、
女２　に、
女１　いち、
女２　に、
女６　ね、またご本読んで。
女４　そのとき人魚姫は、天のおひさまに向かって光る手をさしのべ、生まれてはじめて、涙を流したのでした。

女１　いち、
女２　に、
女１　いち、
女２　に、
全員　ふわっ、・・しゅわわわわわわ・・。
女２　ソーダ水みたいな。
女７　好きだよ。
女１　いち、
女２　に、
女１　いち、
女２　に、
女３　なんで、赤いスパンコールなんてつけたの？
女５　や、ももこがキラキラにしたいって言ってたから、ちょっと。
女１　いち、
女２　に、

女1　いち、
女2　に、
女1　ねえちゃん？
女4　ななこが出ていったら、もうこの家、ジョンとお母さんだけなのね。
女1　いち、
女2　に、
女3　さん、
女4　し、
女5　ご、
女6　ろく、
女7　なな、
全員　なな。
女3　お父さん。
女2　そこは、海の見える病室で、
女1　さようなら、ななこ。
女5　ご、
女6　ろく、
女7　なな、
全員　なな。
女5　がんばってね！お母さん、見てるからね！
女1　いち、
女2　に、
女1　いち、
女2　に、
女1　いち、
女2　に、
女3　さん、
女4　し、
女2　あの頃の私は、顔と匂いと声だけで恋に落ちた。
全員　ぷくぷくぷくぷく、ぷわっ！ざっぱーん！
女1　高台の上の神社までたどり着くと、この町を一望することができる。私は大きく深呼吸して、自分の足取りを振り返る。日記と、ウォーキング、英語教室。自分の時間をどんどん楽しんで、何かもうひとつ、新しいことをはじめたい。ひとつでなくたっていいわ。ふたつでも、みっつでも。よっつでも。

春の風が吹いている。風の中で深呼吸するななこ。やがて歩み出す。風の向こうに小さ

く聞こえるななこの声。
女１　・・そうだ、今年は思いきって、母を旅行に誘ってみよう。いちに、いちに、いちに、・・・。

■７■　６７才　■　春

女４　ろくじゅうなな。・・六十七回目の春。春は毎年来るものだけど、その年ごとに違う色を持っているように思う。そう思うと、なんだかとても愛しい。物忘れはあまりよくならないようだけど、日記をつけていると、ひとつづつの季節が、どれも一生に一度きりであることを強く感じる。・・そうか、この日記も、もう１０年目になるのね。
女６　にゃあ。
女４　ロク？
女６　みゃおーん。
女４　なあに？ロクちゃん。
女６　おなかすいたよ。
女４　さっき、おやつにアレを食べたでしょう？
女６　ん？
女４　だから、アレよ、アレ。
女６　にゃごー。
女４　だから、アレよ、アレだってば。アレ！・・あー、出てこない。やあね、本当に。
女６　にゃあ！
女４　そう！・・そうよ、かまぼこ！笹かまぼこ、食べたでしょう？
女６　もっと食べたいよ。
女４　待ってて、これを書き終わったらね。
女６　にゃあ・・。（残念そうにすごすごと去る）
女４　ええと・・。ああ、やあね、なんだっけ。そう、そうだ・・。夫が突然、猫を連れて帰宅した時には、最初はどうかと思いましたが、今では猫の言っていることがすべてわかるようになりました。年を重ねてからの方が、動物の言っている言葉が、よくわかるようになってきたような気がします。
女１　ボーン、ボーン、ボーン、
女４　あらやだ、もうそんな時間？
女１　ななこさん、おやつの時間ですよ？チクタクチクタクチクタク・・。
女４　このごろでは、時計の言っていることもよくわかります。スプーン

の言っていることも、庭の木蓮の木が言っていることも、雀の言っていることも、お空の言っていることも。・・ただ、夫の言っていることだけは、ますますわからなくなってきたような気もするのですが。えーと・・ああ、やあね。そうだ、笹かまぼこ。違う。そうじゃない、アレ。アレ、あのこと。そう、そうだ。たとえば、先日のことですが・・。

女５　じゃあ、行ってくるから。

女４　え？また、同窓会？

女５　うん。

女４　・・本当に同窓会なのかしら。

女５　本当だよ。・・いや、このごろお葬式で会うことも増えてきちゃったから。会えるうちに、できるだけ皆で会おうってことなんだろう。

女４　うん。

女５　そう。

女３　うん。

女５　ふん。

女７　ななこ？

女５　勝手なこといって、また私をひとりにして。

女４　ちゃんと、お土産買ってくるから。

女５　知らない。

女６　おい、子供っぽいことを言うなよ。

女５　私は７才ですからね。

女２　え？

女５　６０超えたら、子供に戻るっていうでしょう？

女４　そうか。うん・・。いや、そうか？

女５　ふん。

女４　あの、ななこ？

女５　いってらっしゃい。気をつけてね。

女４　じゃあ、行ってくるからね。

女１　なんだか腹がたったので、おやつをむしゃむしゃ食べた後、ふと、私も何処かに行ってみようと思い、水筒と帽子だけをお供に、久しぶりに散歩にでることにしたのです。

女４　いち、・・に、いち・・に、いち・・に、いち・・に、

そうだわ、このごろ、バスの無料パスを使っていない。せっかく春になったんだから、今日は行けるところまで行ってみよう。そう思って乗りついでいるうちに、なんだかどんどん楽しくなってしまっ

て、いくつもバスを乗りついで、そうして私は、ずいぶんと遠くまで来てしまいました。

風の音（女達の声）に混ざって、声が聞こえる。

女７　・・ななこちゃん・・。

女５　ななこ。

女２　ななこちゃん・・。

女７　・・何十年もたったら、ななこは、俺の顔、忘れるのかな。

女４　え？

女２　どうしてそんなこと言うの？

女７　・・ごめん。

女４　ナナセくん、大丈夫。私、絶対に忘れないから！何十年たっても、百年たっても、ナナセくんのこと、忘れないから・・！！

女４のこの二行の台詞は、風の彼方のナナセと見つめ合うかのように、客席に向かって放たれる。徐々に熱を帯び、ななこの満身の力で、とても強く、叫ばれる。

風が吹く。

女７　・・大丈夫ですか？どうされましたか？

女４　え。あ。

女７　おばあちゃん？ご旅行ですか？大丈夫？

女４　や、あの。道はどちらでしょうか？

女７　え？ああ・・。菜の花畑を見に来たのなら、この先ですよ。

女４　ありがとう。

女１　いち、・・に、いち・・に、いち・・

女２　に、

女３　さん、

女４　し、

女５　ご、

女６　ろく、

女７　なな、

女４　あ・・。

風の音、一面の菜の花畑がななこの、目の前に現れる。風の音に混ざって、“ラバーズコンチェルト”（または、そのような類の明るい音楽）が聞こえてくる。

女４　私は、春にたどりつきました。

一面の花畑の中、舞いあがり踊る蝶々達。数々の年代のジェスチャーがダンスになって。曲の合間で、ひとりづつキャンドルの灯を手にする女達、やがて一脚の椅子に集まり・・。

■８■　７７才　■　冬

女達　ななじゅうななな。・・そう、ななじゅうななの時、私は、はじめて死にました。

誰も座っていない、一脚の椅子。そのまわりに集まる６人の女（ななこ達）。それぞれの手に本はなく、キャンドルをもっている。
女５は本（※１）を持ち、その傍らの椅子に座っている。
女５の足元にもキャンドル。

女５　おはよう。・・どう？気分は？
女２　ふわっ、しゅわわわわ～。
女５　今日は、顔色がいいね。
女２　おはよう。
女５　おはよう。
女１　いち、に、いち、に、
女５　何か、食べる？今日はね、ペコちゃんが買ってある。お誕生日だからね。楽しみにしてて。
女６　じゃあ、お祝いのケーキは？
女５　そう、お祝いのケーキ。
女６　すごい、魔法のランプみたい。
女５　うん。一緒に食べよう。
女２　ナナセ君。
女５　え？
女２　ナナセ君。
女５　・・。
女７　もう、祝うような年でもないんですけど。
女４　私は、春にたどりつきました。
女３　お父さん。
女７　お母さん。
女６　おばあちゃん。
女１　ももこ。
女５　うん。そうか。
女２　あの頃の私は、母が、好きじゃなかった。好きじゃないことが、とても悪いことに思えた。
女５　そうか。そうだったんだね。

女6　でも、おかしな話で、
女2　何十年もしたら、私は、
女5　ななこ。
女3　・・ただいま。
女5　うん。
女6　ね、またご本読んで。
女5　そうだね。じゃ、今日は一緒に読もう。
女5絵本を持ってくる。その姿を嬉しそうに見つめているななこ達。
（絵本「The Important Book」より一部引用。）
女5がまず一行読みあげ、改行ごとに、女1～7の順番でひとりづつ、女5の読んだ言葉を復唱してゆく。女5「たいせつなこと」、女1「たいせつなこと」、女5「ゆきはしろいということ」、女2「ゆきはしろいということ」という具合に。

たいせつなこと
ゆきは　しろい　ということ
つめたく　はかなく
そっと　そらから　まいおちて
ゆきは　かがやく
すがたは　ちっちゃな　おほしさま
すいしょうの　かけら
ゆきは　ひんやり　ひえて
ふわりと　とけて
きえてゆく
けれども
たいせつなことは　ただ
ゆきが　しろいこと

そっとページがめくられる。新しい詩があらわれる。引き続き、復唱でよみあげられる。

たいせつなこと
あなた　ということ
あなたは　あなた
あのひ　あかちゃんだったあなたは
ねむり　なき　わらって　ふくらんで
いま　りっぱにこどもになりました
ねむり　なき　わらって　あゆんで

そうして　いつか
おとこのひとや　おんなのひとに　なるでしょう
けれども　たいせつなことは
（あなたが　あなたで　あること）　※実際にはこの最後の行は読まず

そして、「たいせつなことは」に続く、最後の行にさしかかり、
女５　あなたが、
女６　あなたが、
女５　あなたで、
女４　あなたで、
女５　・・・。
女４　ねぇ。
女５　ん？
女１　わたし、
女４　なんだか、とても眠い。
女５　そうか、わかった。・・じゃあ、少しおやすみ。
女１～７は、各自、自身の最後の台詞の後に、ひとりづつそっとキャンドルを吹き消す。
女５、絵本を閉じる。そして、本を持ち、自身の足元のキャンドルを消し、部屋を出ようとすると、
女２　ごおくん。
女５　・・・。
女７　ごおくん。
女５　うん。
女６　・・・。（にっこり微笑み返し、自分のキャンドルを吹き消す）
女達　おやすみなさい。
女５　おやすみ、ななこ。

女５、本を閉じ、ななこの物語を閉じる。
と、最後の灯も消える。

静かな温かい闇が、世界を包んでいる。

（おわり）

－上演時間　約７７分－

●引用元

『The Important Book』より　引用
原作・Margaret Wise Brown（1910 - 1952）出版社・HarperCollins（USA）
引用部の翻訳・吉田小夏（本作の為に作者自身で翻訳）

『フェイク』（絶版）より　引用
著・小沢 正（1937 - 2008）出版社・パロル舎（注・現在消滅）

●参考文献

『人魚のひいさま』
原作・Hans Christian Andersen（1805 - 1875）
訳・楠山正雄（1884 - 1950）出典元・青空文庫
翻案・吉田小夏

（P42・・解説）本とは、リーディングドラマ形式上演時に各俳優が手にしている台本（戯曲）のことである。文庫本のように見えるが、その中身はななこの物語に他ならない。

＜上演記録＞

初演：2013 年 2 月　@ サラヴァ東京
On7 第 0 回公演　　＊リーディングドラマ形式で上演
『Butterflies in my stomach
～ ななつの音色が奏でる、大人のための絵本の時間 ～』

再演：2013 年 11 月　@ 新宿ゴールデン街劇場
ENBU ゼミナール 2013 春期コース中間発表会公演
＊リーディングドラマ形式で上演
『Butterflies in my stomach　～the 26th class version～』

再演：2019 年 12 月　@ アトリエ春風舎
青☆組 vol.25　劇団本公演として上演

再演：2020 年 11 月　@桐朋学園芸術短期大学　内 小劇場
桐朋学園芸術短期大学 専攻科演劇専攻試演会として上演

著者：吉田小夏

＊　本作品の上演をご希望の方は、青☆組へお問いあわせください。

＊　乱丁・落丁などございました際には、お手数ですが下記にお問い合わせくださいませ。

＜お問い合わせ＞

e-mail：office@aogumi.org

青☆組 HP：www.aogumi.org